# 「はじめてのものに」

## ――立原道造への追想

岩崎允胤

旧制高校一年の盛夏、木曽の渓谷に沿う福島町の外れにある、とある林野局の宿舎で、わたくしは、読書の日々を送っていた。書斎の窓を開けると、渓谷を距てて鬱蒼と茂る濃緑の山々が連なり、その麓を、蒸気機関車が、きまった時刻に、気笛を一声高く朗々と吹き鳴らし、もくもくと煙を流しながら、列車の轍の響を余韻長く伴奏させて、走りぬけていった。

木曽でのはじめての朝、そこに来てひと夏を送るようにと、わたくしを誘ってくださった先輩の高尾亮一さんが、勤めに出かけるとき、「いつでもそこの書斎を使って勉強していいですよ」といわれたので、旅行鞄からレクラム版のシュトルム『インメンゼー』をとりだして書斎に入った。そのとき、窓ぎわの大きな机のうえに見出したのが、楽譜型の二冊の詩集『萱草に寄す』と『暁と夕の詩』（一九三七年刊）であった。表紙にしるされている立原道造という名前がわたくしの瞳を釘付けにした。まぎれもなく、それは数年前（一九三四年）、本郷森川町の一隅、高尾さんの下宿の二階で会った大学生の名前にほかならなかったからである。その夜の印象は、やさしく、鮮やかで、それ以来「立原」の名はわたくしの記憶から消えないでいた。それにしても、目の前にあるこの詩集の爽やかな清新さは何とも驚きであった。

『萱草に寄す』を開くと、冒頭のソナチネ（SONATINE）「はじめてのものに」は、そのどこまでも清澄な、やさしい日本の口語の、しかしまだわたくしがだれからも聴いたことのない、不思議な音楽で、わたくし

をとらえた。それは、遠い角笛のひびきのような、語と語との繋がりの奏でる澄んだ調べのうえに、美しい豊かな詩想の世界のイメージをのせていた。

ささやかな地異は　そのかたみに
灰を降らした　この村に　ひとしきり
灰は悲しい追憶のやうに　音立てて
樹木の梢に　家々の屋根に　降りしきった

ソナチネは次の三行で結んでいた。

いかな日にみねに灰の煙の立ち初めたか
火の山の物語と……また幾夜さかは　果して夢に
その夜習ったエリーザベトの物語を織った

偶然は重なるものである。わたくしは、この高校一年生の夏休みに、レクラム版でシュトルム『遅咲きの薔薇』(Späte Rösen) を読み、ついでエリーザベトの物語『インメンゼー』(Immensee) を読みかけて、木曽を訪れていたのであった。

萱草はゆうすげともいう。立原はこの最初の詩集の題名について次のようなコメントをしている。「萱草はゆうすげである。それは高原の叢で夏のころ淡く黄く咲く花だった。そしてそれは夕ぐれの薄明りを愛する花

だった。僕の村ぐらしの日々はその花の影響の下にあるのを好んだ」と。

＊　　＊

それは、この木曽の夏を遡る数年前の七月のある日のこと、わたくしは中学の下級生であった。わたくしの家は本郷西片町にあって、高尾さんの下宿に近かった。高尾さんは、その頃、大型の美しい英語の絵本や、アミーチスの『クオレ（愛の学校）』（岩波文庫）などを買ってくださり、稚い（精神的に）わたくしは、ときどきその下宿を訪ねた。その夜も遊びに伺ったところ、ちょうどひとりの大学生が窓辺に凭って坐っておられ、高尾さんはわたくしを紹介してくださった。それが立原道造さんであった。「今日はお役所から仕事を持って帰っていて、済むまで一、二時間かかるだろう」とわたくしにいって、立原さんに「そのあいだ岩崎君と一緒に遊んであげてください」と頼まれたのである。立原さんは、府立三中きっての秀才で、一高から、いまは東大建築学科の学生であって、美学的に建築のことを研究している、数学がとくにすばらしい、とのことであった。わたくしは数学が好きだったから、数学といえば、稚いわたくしには親近感が増すと思われて、こういわれたのであろう。

立原さんは、いろんな話をしてくださった。稚いわたくしの喜びそうな話であった。しかし、何の話であったかは、覚えていない。当時かなりモダンなラッキー・パズルの遊びを、一緒に、手を触れあうほどに親しくやってくださったのが、忘れられない。もし「立原」の名がその後、木曽福島での、あのような美しい詩集との出会いという――わたくしなりにいえば――劇的なかたちで現れなかったとしても、やがて遠からずどこかでわたくしは新進の詩人としてのその名を見付けたにちがいない。だが、その名は、あの夏夜の、初対面の大学生の懐しいやさしい語り口そのままに、しかしこんどはいっそう美しい不思議な調べを伴って、劇的に、木

曽の夏、高校生のわたくしの前に現れたのであった。

＊　＊

立原さんに会う機会はそれから二度となかった。しかし、わたくしは、高尾さんや立原さんのあとを継いで、やがて向陵の校門をくぐった。高尾さんは、立原さんの二年先輩で、一高では、ほかのひとの伝えでも、文芸部などを中心にずい分活躍していたらしい。谷崎、芥川、それから久米正雄、堀辰雄ら、文芸部の歴史を綴った輝やかしい伝統の話は、いつも立原さんの話に戻っていった。東京・下町の町並を立原さんが愛好していたこと、いろいろのコースの町角をよく記憶していて古本屋を漁って歩いたこと、折々、墨堤に腰をおろして隅田川をのぼりくだりするポンポン蒸気の風情を楽しんだこと、銀座の喫茶店「門」のことなど――。

あるとき、立原さんの処女作（と、いってよいであろうが）、「あひみてののちに」について高尾さんが語ったことを思いだす。この小説は、近年出版された岩波文庫版『立原道造詩集』（杉浦明平編）の巻末「年譜」によると、一九三一年十月、「一高『校友会雑誌』に掲載され、その早熟な作風によって自然主義傾向の一高文壇に一石を投じた。十一月頃、生涯兄事した堀辰雄の面識を得る」とある。高尾さんの話によると、当時文芸部委員をしていた彼のところに、「ある日、立原君がやってきて『こんな小説を書いたんですけれど、題がまだないんです』という。翌日立原君が来たとき、『〝あひみてののちに〟なんていうの、どうかしら」とぼくがいったら、『それがいい、それにする』と喜んで、結局、そのような題になった」とのことである。わたくしが高尾さんにきいたところでは、「あひみてののちに」の題名の由来はそのようであるらしい。なお、高尾さんは、いま触れた「年譜」の一九三五年のところに、同人雑誌『未成年』の創刊同人十一名中の一人として、杉浦明平、立原道造らとともに名をつらねている。

その頃、立原さんは『萱草に寄せて』の冒頭を飾る詩「はじめてのものに」を書いたのである。そしてまた、その翌年、

かなしみではなかった日のながれる雲の下に
僕はあなたの口にする言葉を覚えた
それはひとつの花の名であった
それは黄いろの淡いあはい花だった

にはじまる献詩「ゆふすげびと」を書いて贈った若い女優、今井春枝と識り合うことになったのも、この時分のことらしい。

立原さんは、高原に咲く、まつむし草、桔梗（ききょう）、ぎぼうじゅ、おみなえし……、どの可憐な花々にも心をよせ、花束をつくり、花の輪をつくり、詩にうたったが、なかでもこよなく愛した花がゆうすげであった。「林空（そら）」という習作（エチュード）のなかで、「ゆふすげの花はせつない眼ばたきのやうに」という丸山薫の一節を引き、「せつない眼ばたきといはれた花を、その黄いろな一輪をともした叢（くさむら）の青空に、僕はたたずんで聞く。梢を移る鳥たちの声を、風に似た汽車のとほい笛を。……」と立原さんは書いている。そして『萱草に寄す』に収められている「夏花の歌」のソナチネでは、ゆうすげの花に乙女への淡く切ない夢を託している。

あの日たち　とけない謎のやうな
ほほゑみが　かはらぬ愛を誓ってゐた

薊（あざみ）の花やゆふすげにいりまじり
稚（をさな）い　いい夢がゐた――いつのことか――

どうぞ　もう一度　帰っておくれ
青い雲のながれてゐた日
あの昼の星のちらついてゐた日……

失われた愛への悲しみは、ゆうすげの花の影に揺れている。双手をさしのべても二度とは帰らない美しく楽しかった日への愛惜の想いに――。
わたくしも、高原を訪ねては、ゆうすげの淡く気品ある面影を探している。

＊　＊

木曽の夏、あの書斎で立原さんの詩にはじめて触れたわたくしは、その詩をノートにみな写しとった。そしてわたくしも、いつか立原さんのような詩を書きたいと思った。非才の身、それは成らない望みであったが、立原さんの詩のもつ不思議な調べはいつもわたくしの心の奥に、リラの低音のように美しくひびいている。
浅間山麓をわたくしがはじめて訪ねたのは、一九四四年の九月初旬である。当時、わたくしには、天皇制への疑問、ファシズムと翼賛政治・軍部の横暴への拒否があった。わたくしは、窒息しそうな空気のなかで人間の自由を求めていた。「窓を開けよう。広大な大気を入れよう。半神的な人々の息吹きを吸おうではないか」と、ロランは『ベートーヴェンの生涯』の冒頭で書いたが、わたくしは東京の職場での息づまる生活に圧迫さ

れて、精神がいたく傷つき痛んだ。そしてヘルダーリン、ゲーテ、ブレーク、ロバート・ブラウイング、それに立原さんの詩をたずさえて、山麓で幾日かを送った。開け放たれた大きな窓からは、浅間の噴煙がいつもみえた。すべては、丘の小草と、山と煙と、どこまでも青い空であった。『萱草に寄す』のなかの一つのソナチネ「のちのおもひに」に、

夢はいつもかへって行った　山の麓のさびしい村に
水引草に風が立ち
草ひばりのうたひやまない
しづまりかへった午さがりの林道を

うららかに青い空には陽がてり　火山は眠っていた
――そして私は
見て来たものを　島々を　波を　日光月光を
だれもきいてゐないと知りながら　語りつづけた――

噴煙ののぼる日々、激しく灰を降らす日々、また静かに眠る日々、……立原さんのいたく愛したその山の麓で、戦時体制のもとで痛んだわたくしの心は、いやされた。

立原さんから受けたものはじつに大きいが、詩としては、わたくしの非才のゆえに目立つものは何もないであろう。わたくしの書いた詩はそのようにみな拙いが、金子光晴さんがかつてすこし賞めてくださったものに

譚詞（たん）「ひやしんすの歌」一篇がある。詩の内容としては直接なんの関係もないが、立原さんの詩集が、未完に終わったものを含めて「風信子叢書（ヒアシンス）」の諸篇とされていることに、わたくしの「ひやしんす」の悲恋の歌はなにほどかはあやかっているのかもしれない。

（一九九二・八・二三）